【194】

氏　名(本　籍)	関　根　正　美（栃木県）
学位の種類	博　　士（体育科学）
学位記番号	博　乙　第　1,231　号
学位授与年月日	平成 8 年 11 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	ハンス・レンク（Hans Lenk）のスポーツ哲学に関する研究
主　査　筑波大学教授	教育学博士　片　岡　暁　夫
副　査　筑波大学教授	教育学博士　山　本　恒　夫
副　査　筑波大学助教授	教育学博士　松　本　和　則
副　査　筑波大学講師	教育学博士　清　水　　諭

論文の内容の要旨

1．論文の構成

本論文は，序論，第 1 章～第 4 章，結論，補論および文献目録から成り，268ページ（1 ページあたり1200字で，400字原稿用紙約804枚に相当する）より構成されている。

2．論文の内容

本論文は，スポーツを哲学的考察の対象とすることによって人間と社会に関する問題の考察を試みようとする問題意識に支えられて，現代ドイツの哲学者であり，かってのボート競技における金メダリストであるハンス・レンク（1935－）のスポーツ哲学を解明したものである。

序論では，著者の立場を明確にすると同時に，レンクの思想に関する先行研究の検討をふまえて，4 つの研究課題を明らかにし，これらの課題を解明するために実存論的アプローチをとる必要のあることを説明している。

第 1 章『H. レンクのスポーツ哲学における主要概念への道程』では，レンクのスポーツ哲学における主要概念を明らかにしている。まず，レンクが，現代におけるプラグマティズム的理性を探究する中で，人間の達成行為に注目し，その具体的モデルとしてスポーツの哲学的研究へ向かったことを明らかにする。レンクが人間の達成を重視する背景には，彼の人間観があり，それがホモ・ペルフォルマートルである。レンクのホモ・ペルフォルマートルとは，身体的達成行為によって自己超越をする存在である。こうして，第 4 節でレンクの意図する「独創的達成（Eigenleistung）」の概念が明らかにされている。

第 2 章『競技者についての思想』では，レンクのスポーツ哲学における競技者についての思想が考察されている。第 1 節では，ポール・ワイスと滝沢克己における競技者に関する思想をふまえて，レンクの競技者の概念を明らかにしている。レンクは，スポーツの競技者を「独創的達成」に至る主体であるとみなす。第 2 節において，競技者が「独創的達成」に至る過程を考察している。第 3 節では，レンクにおける競技者についての思想が，概念的把握をこえて「成熟した競技者」および「民主的トレーニング」の教育的意義に展開することを明らかにしている。さらに第 4 節では，「民主的トレーニング」によってもたらされる理性の存在ならびに競技者擁護の問題が開示されている。

第 3 章『スポーツにおける実存の問題と生涯スポーツ論』では，第 1 節にて生の概念に支えられたレンクのスポーツ哲学がレンク自身の実存体験に基づいて考察され，レンクが達成による自己実現ならびに自己の生の肯定

を重視していることを明らかにしている。しかし，レンクのスポーツ哲学はトップレベルの独創的達成のみを語っているのではない。そこで，第2節において独創的達成の概念から展開されるレンクの生涯スポーツ論が考察されることになる。レンクの生涯スポーツ論は，人間に共通する「身体の衰え」という「他なるもの」を受け入れつつ，人間が若年から老年を通じて多元的に生きる可能性を示唆するものであることを指摘している。第3節では，これまでの考察から「独創的達成」の概念に対し，スポーツ体験の実存論的表現並びに生涯スポーツの原理という，二つの特徴が与えられていることを解明している。

第4章『スポーツの哲学』では，第1節において，「独創的達成」を主要概念とするレンクのスポーツ哲学から，人間と社会を考えることの可能性を示している。第2節では人間とスポーツとの積極的な関わりが明らかにされ，第3節で，レンクのスポーツ哲学が現代ドイツ哲学における理性復権の試みに連なるものであることを明らかにしている。

結論は，1．研究の総括，2．結論および展望からなる。結論の第1は，レンクのスポーツ哲学は達成の哲学であること，第2は，生の哲学がレンクの多元論的なスポーツ哲学の基調をなしていること，第3は，レンクのスポーツ体験が彼のスポーツ哲学の構想に影響を与えていること，第4は，レンクの目指した現代における理性復権の試みが「独創的達成」という彼独自の概念を展開することでなされたということ，以上である。そして，以上の理論的認識に基づき，体育学におけるスポーツの哲学的研究の意義が展望として示されている。

審査の結果の要旨

わが国の体育学の領域において，スポーツを哲学的に解釈する試みはまだ端緒についたばかりである。また，ハンス・レンクのスポーツ哲学に関する研究は，わが国ではこれまで本格的な取り組みがなされていなかった。このような状況の中で，本研究は，ハンス・レンクのスポーツ哲学を解明し，スポーツの哲学的研究に貢献したと言える。

研究課題の解明にあたり，著者のとった哲学的手法は堅実である。ハンス・レンクの著作を原書に忠実かつ系統的に読解し，実存論的視点からレンクのスポーツ哲学の内実を明らかにしている。実存論的視点によるレンクのスポーツ哲学へのアプローチという著者独自の方法によって，スポーツ活動に存在する哲学的諸問題を明らかにした点に，本論文の価値が認められる。論文の記述は論理的かつ体系的であり，文献の解釈も厳密になされている。しかし，本論文の枠組みは実存論的アプローチに規定されており，今後，社会哲学的および教育学的な視角を導入することでさらなる展開が期待できる。この点は今後の課題となるが，本論文の学術的価値を左右するものではない。

よって，著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。